

## 10

## 長崎医科大学の原爆記録

三根眞理子<sup>1)</sup>, 相川 忠臣<sup>2)</sup><sup>1)</sup>長崎大学原爆後障害医療研究所, <sup>2)</sup>日本赤十字社長崎原爆病院

被爆70年の昨年から、改めて長崎医科大学の被爆関係資料の調査整理を始めた。長崎医科大学の原子爆弾投下直後の記録の代表的なものは調 来助第一外科教授の残された原爆被災復興日誌、調教授が中心となって纏められた長崎原子爆弾災害調査統計資料と物理的療法科部長の永井隆助教授が残された原子爆弾救護報告である。被爆50年の折、長崎医科大学の被爆資料の調査を行い、多くの資料を見つけた。その中に長崎医科大学から原子爆弾調査結果として日本政府の都築調査団に提出されながら公表されることのなかった3つの重要資料がある。おそらく原子爆弾調査研究を統括するGHQグループの長が第一級の原爆資料として機密扱いにしたのであろう。

## 1. 長崎医科大学（古屋野宏平）昭和20年8月9日長崎医科大学職員其他所在場所調査

この調査の原資料と思われるのが長崎大学医学部附属病院庶務係にあった昭和20年8月9日原爆当時の死亡者及び生存者名簿と医学部事務にあった昭和20年8月9日原子爆弾当時人員一覧表である。これらの資料から入院患者の被爆状況がわかった。8月1日、長崎医科大学附属医院はB29による空襲を受け、医学生3人が死亡した。軽症の患者は退院させたので、原爆当時の入院患者は107名と少なかった。その内死亡者は53名もしくは54名であった。付添人は20名いたが、そのうち19名が死亡した。コンクリートの建物中でベッドを離れなかった患者は半数が、健康な付添人は唯一人が生き延びた。基礎医学キャンパスの校舎と事務部のある本館は木造であり、五つの講堂で学生が授業を受けていた。600名は居たであろう基礎キャンパスで生き残ったのは、防空壕を掘っていた6名と、地下の薬品庫で整理をしていた6名、防空壕で金庫の修理をしていた3名合わせて15名しかいなかった。事務部と基礎各教室の名簿上の生存者は出征中の者が多く、出勤しなかったものもいる。

## 2. 長崎医科大学（調 来助）長崎原子爆災害調査統計資料

昭和20年10月から12月までの隣保班の聞き取り調査であるこの資料はGHQグループの調査報告書が1951年にまとまったのち、1953年になりMilitary Surgeon Vol. 113: 251-263pに一部が公表され、1956年にResearch in the effects and influence of the nuclear bomb test explosion Vol. 2: 1501-1519p日本学術会議放射能影響調査報告刊行委員会編にも発表された。ようやく1982年になって『長崎原爆体験—医師の証言』（調 来助、吉澤泰雄著 東京大学出版会）から出版され、全資料が読めるようになった。23地域1502名の居住者中559名が死亡した。爆心地から0.8kmで100%近い死亡率であるが、0.8kmのコンクリートの大学病院は42.3%、1.5kmで50%内外の死亡率が1.6kmで10%台に激減する。1.5-2.0kmでの死亡率は壮年でほとんどなく、10歳以下、11-20歳、61歳以上で15%内外である。2.0-2.5kmでの死亡率は成人でゼロ、10歳以下のみで15.4%である。

## 3. 古屋野宏平他11名の原子爆弾体験記録

医師としての原子爆弾体験記録の序言は長崎医科大学長事務取扱古屋野宏平によって書かれ、教授、助教授、助手、副手、医学生11名の体験記録である。北村包彦教授は和文に加えて英文でも執筆している。松下兼知助教授は白血球300から400まで減少、高熱時22回に及ぶ輸血により瀕死の重傷から奇跡的に生還した。その詳細な記録を読むと被爆後の初期症状を正確に知ることができる。松下美術館所蔵の、彼の描いた被爆絵と古屋野宏平学長との連名による英文の母校存続の為のマッカーサーへの嘆願書も紹介する。